

《短報》

下関市木屋川河口干潟における絶滅危惧種・
オオシンデンカワザンショウ *Assiminea* sp. I の生息

松田真紀子・増野和幸・川野敬介

豊田ホタルの里ミュージアム, 〒750-0441 山口県下関市豊田町大字中村 50-3

はじめに

山口県下関市と山陽小野田市との境を流れる木屋川は、大笹峠（長門市日置中）を源流とする二級河川（総延長 43 km）であり、瀬戸内周防灘に注ぐ。河口には広大な干潟が形成され、カブトガニやセンベリアワモチといった貴重な生物が生息するなど、特筆すべき環境が残っている（福田・山西, 1996）。今回、報告者の1人、松田は干潟に棲むゴカイ類の調査中、オオシンデンカワザンショウ *Assiminea* sp. I の群生地を発見したので報告する。オオシンデンカワザンショウは、『干潟の絶滅危惧動物図鑑』（2012）に拠ると大分県中津市大新田・三百間・鍋島、杵築市守江湾、福岡県北九州市曾根干潟等に分布。殻表は鈍い光沢があり半透明、赤茶褐色で色帯はなく、臍孔は狭く開く。山口県長門市油谷湾でも本種に似た死殻が得られている。

生息地と生息状況

本種の木屋川干潟における生息状況は、河口に広がる干潟全域に分布しているのではなく、河口から沖合約 20 m 付近から帯状に群生が見られた。殻高 1.5 mm ほどの個体が（図 1）、びっしり、それこそ足の踏み場もないほどに群生していた（図 2）。生息する干潟部分は、満潮時には水深約 1 m になる。干潮時には長靴を履いて歩ける程度の砂泥底が現れる。生息個体数は驚異的で、干潟全体では天文学的な数になるほどである（図 3, 4）。今回発見したのは、2021 年 9 月 23 日。

図 2 の矢印に見られるように広く一様な面状になるのではなく、群生の塊が帯状につながっている。これは波の影響も考えられるが、梶原ら（2021）が指摘しているように、河口から運搬される有機物や栄養塩類、また栄養的要因だけでなく、底質の粒径、塩分、温度といった非栄養的要因も影響していると考えられる。



図1. オオシンデンカワザンショウ
※Scale bar : 1 mm.

生息地での生態観察

水没時の本種の生態を観察するため、生息地周辺が浅く水没しているうちから観察を行った。観察は 9 月 23 日に本種の生息を確認した場所周辺で、翌日 9 月 24 日に行った。この日は中潮で干潮時刻は 17 時頃である。観察を開始した 14 時頃は、潮が引ききっておらず、観察場所の大部分が浅く水没していたが、砂泥底の少し高くなっている場所は所々が干出しており、そこではすでに多くの本種が砂泥上にあらわれ、

表面を這うなど活動をしている様子が見られた。一方水没している場所では本種が見られなかったため、そちらの潮が引くのを待ち、本種がどのように砂泥上に表れるのか観察を続けた。

干出したばかりの砂泥表面には小さな窪みが数多く見られた（図 5-1）。よく見ると窪みの底砂が僅かに動いたり、殻や腹足の一部が覗いていたりするなど、砂泥の窪みの一つ一つに本種が浅く潜っていた。見ていくうちにも砂を押し分け砂泥中から次々と這い出て砂泥表面に現れ始めた（図 5-2）。その様子をしばらく観察した後に周辺を見



図2. 干潟上の群棲の並び（矢印）

渡すと足の踏み場もない程の群生となっていた。

この観察で、水没時には砂泥中に潜り、干出直前には砂泥中の浅い部分にいて干潮時の干出とともに砂泥表面に這い出して来るという生態が観察できた。

オオシンデンカワザンショウの特筆すべき生態として、“波の表面に腹足で乗って移動する”という行動が大分県中津市大新田において発見されており、他の軟体動物で知られていない極めて特殊な生態であることが紹介されている（山下，2014）。

今回の調査中に木屋川干潟の個体でもこの行動が観察できたので併せて報告する。この行動を観察したのは9月24日と10月26日であった。観察時、本種の群生の大部分は干出した砂泥底に見られたが、周辺に点在する大小の潮だまり（図 5-3）の水面上に数個体が浮いているのを見つけた。浮いていた個体を観察すると殻口から出した腹足を水面上に密着させて浮いており（図 5-4）、風にあおられても沈むことなく潮だまりの水表面を流れるように移動する様子が観察できた。



図3. おびただしい数の個体群

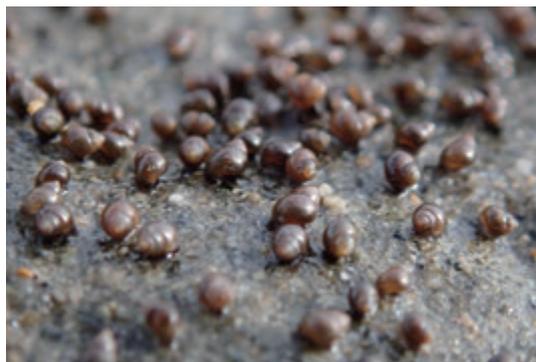


図4. 砂泥上を匍匐しながら食餌

まとめ

本種の生息密度は非常に高く、興味深い移動分散の生態をしていることが本調査によりわかったが、環境省のレッドデータリスト（2020）では絶滅危惧Ⅱ類、日本ベントス学会レッドデータブック（2012）では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。木屋川河口域に広がる干潟や中州には多くの貴重な生物が生息しており、今回報告する本種も含めて、生息環境が変化・悪化し、生息が脅かされることのないことを切望する。



図5. オオシンデンカワザンショウの生息

1. 干出直後に見られた砂泥表面の窪み; 2. 砂泥の窪みから這い出てきた個体; 3. 干潟に点在する潮だまり; 4. 水面上に張り付いて浮いている様子.

謝辞

種の同定は矢野重文氏（日本貝類学会評議員）にお願いした。現地調査に際して、久志本鉄平氏（下関市立しものせき水族館）にご協力とご指導頂いた。ここに記して感謝の意を表す。

参考文献

- 福田 宏・山西良平（1996）下関市小月，木屋川河口（104- 105p.）. In WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京．
- 梶原 楓・南條楠土・阿部真比古・足利由紀子・山守 巧・和田太一・須田有輔（2021）地下湧水が干潟のマクロベントス群集構造に及ぼす影響．*Journal of National Fisheries University*, **70**(1): 1-9.
- 日本ベントス学会（2012）干潟の絶滅危惧動物図鑑－海岸ベントスのレッドデータブック－. 285pp., 東海大学出版会, 秦野.
- 環境省（2020）レッドリスト 2020 補遺資料 <https://www.env.go.jp/press/files/jp/113684.pdf>
- 山下博由（2014）中津干潟の貝類（軟体動物）について．中津干潟レポート 2013, 22-24.